

「手取川上流崩壊地に関する技術検討会」の概要について

平成28年2月5日

委員から以下のような意見がありました。

<これまでの対策の評価>

- ・急傾斜地においても吹付資材が一定程度残存しており、対策工が崩壊地の土砂移動の抑制効果を一定程度発揮したと考えられる。
- ・昨年は、例年と比べ、雨量、流量とも少なく、一年間の濁度観測のデータをもって効果について断定することは困難であるが、対策工が濁度軽減に効果を発揮することも期待しうる。

<今後の対策の方向性>

- ・現地へのアクセスを考慮すれば、ヘリコプターを活用した浸食防止工や緑化工が中心となる。融雪後の見極めが必要であるが、来年度の対策は、確実に緑化が進むよう、草本種子の活用等、関係機関と連携して可能な工法を検討することが必要。
- ・斜面をどう緑化していくかがポイントとなるが、現地の土壌がせき悪なことを踏まえると、木本類、草本類の種子の活用や栄養分のある土壌づくりについても検討が必要。また、崩壊地の緑化に向けては、画一的な対策ではなく、昨年実施した吹付工の効果も踏まえつつ、浸食が激しい箇所、堆積が進んでいる箇所等で崩壊斜面を地帯区分した上で、対策を講じることが有効。そして白山の生態系を損なわず早期に斜面を被覆できるような植栽工法の開発も同時に行う必要がある。
- ・ヘリコプターによる緑化の確実性向上に向けて、崩壊斜面における簡易な基礎工を施工するための人力によるアクセスの整備やベース設置（歩道・ヘリポートなど）の可能性について検討・模索していくことが必要。
- ・今後も濁水は起こりうるものであることを踏まえると流域全体での対策の実施が必要である。上流域の治山対策に取り組みつつ、流域全体での土砂管理に向けて関係機関が連携した対策が必要。
また、手取川流域は過去からも災害に向き合ってきた地域であり、他方で、自然の恵みを生かしたジオパークの指定にも取り組んできたところ。影響が多方面にわたることを踏まえて、今後どのような対策を進めていくかについて、地元とともに考えていくことが重要。

(以 上)